

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	産業研究所
大項目	11 教員・教員組織
中項目	
小項目	11.0.2 学部・研究科等の教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。
要素	編制方針に沿った教員組織の整備 授業科目と担当教員の適合性を判断する仕組みの整備 研究科担当教員の資格の明確化と適正配置(院・専院)
小項目	11.0.3 教員の募集・採用・昇格は適切に行われているか。
要素	教員の募集・採用・昇格等に関する規程および手続きの明確化 規程等に従った適切な教員人事
小項目	11.0.4 教員の資質の向上を図るための方策を講じているか。
要素	教員の教育研究活動等の評価の実施 ファカルティ・ディベロップメント(FD)の実施状況と有効性

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 研究プロジェクトの構成は、研究員の所属が偏らないようにする。	→新規の研究プロジェクトの構成は、研究員の所属が3部局(学部・研究科)以上とする。	B	A	A	B	A
2. 研究プロジェクトの構成は、本学教員に限らず、学外からも専門家を客員研究員として加える。	→新規の研究プロジェクトについては、客員研究員が2名以上加わる構成にする。	A	A	A	A	A
3. EUIJ関西事業の推進のために、EU研究者を教員として、産業研究所に配置する。	→2010年現在欠員のEUIJ関西事業を推進する教員1名を2011年度に配置する。	C	A	A	A	A
4. 学外機関や社会との連携を深めるため、産業研究所で研究活動を行う受託研究員・学外研究員を受け入れる。	→産業研究所で研究活動を行う受託研究員・学外研究員を毎年1名以上迎える。	D	C	C	C	C

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 研究代表者へ複数学部の教員を研究員として採用すること、学外研究員も必須として研究会を立ち上げるよう求め、3年間の研究期間に研究員の構成を見直しながらバランスのとれた研究成果をあげてを求めた。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 共同研究員の所属は原則3学部以上にわたることとして運用。その結果、3プロジェクトのうち一部は2学部となる場合もあったが、それについては、学外からの研究者や実務家を研究員として受け入れて研究者間のネットワーク形成をはかること、さらに研究分野のバランスを考慮して学内研究員の人数を調整する必要があった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 研究プロジェクト公募に際し、3組織以上にこだわらず、学外研究員の受け入れを活性化させるため、募集要項において、研究員は少なくとも学内の3組織以上、または学外研究機関あるいは産業界を含む場合には学内の2組織以上の専任教員(任期制を含む)を含むものとし、運用の柔軟化を図っている。	☆
		その他	☆
			☆
目標2	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 新規プロジェクトの代表者は研究員の構成を学内、学外双方の研究者を受け入れて運営することを前提とすることとし、2013年度からのプロジェクト公募に際し、募集要項に学外研究機関ならびに産業界にまたがる研究組織であることを明記した。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2009年度からの研究プロジェクトはすべて学外の研究機関等から積極的に研究員を加えており、研究活動に広い視野を与え、新たな問題意識や最新の研究動向についての情報共有ができ、学内研究員のインセンティブを高めることができた。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 共同研究活動の基軸となる研究員については今後も学内、学外の専門家が相互に連携し、社会的に評価される研究成果の公表に向けての活動を支援する。	☆
		その他	☆
			☆
目標3	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか EUIJ関西事業を促進するための教員1名採用については2012年2月に公募し同年9月より任期制教員市川顕准教授を採用、研究所に配属した。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か EUIJ関西事業の中心である修了証プログラムに関わる授業を担当。EUに特化した総合コース科目の新設、修了証プログラム履修者増、。事業促進のため学内各部局、特に国際連携機構との連携をはかりEUIJ関西の学内認知度が向上した。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か EUIJ関西第4期採択を前提にEU研究者を対象に教員を募集する必要がある。	☆
		その他	☆
			☆

目標4	C	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 受託研究員、学外研究員受け入れの方向性は共同研究プロジェクトを基軸として取り組んだ。共同研究に参画する研究者は学外の研究機関や経済団体等に所属。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 学外の諸機関との連携については、受託研究員等の受け入れの方向性を模索していたが、結果として国際関係機関・コンソーシアム大学(神大、阪大)との連携事業であるEUIJ関西事業、共同研究プロジェクトにおいて関西生産性本部などの経済団体との連携事業を推進、さらに共同研究プロジェクトの主題に沿った通信研究会との受託事業を実施した。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 社会連携の取り組みとして共同研究プロジェクトの枠組みを有効に活用して学外からの研究員を受け入れる体制を充実させることが必要である。	☆
		その他 学外機関や社会との連携を深めるため、産業研究所で研究活動を行う受託研究員・学外研究員を受け入れる。	☆
		備考	☆